

令和5年度・令和6年度「ちばっ子の学び変革」推進事業研究成果報告書

市原市立五所小学校

研究主題

算数科における基礎・基本の確実な定着を図る指導の充実
～わかる・できる喜びを実感し、自ら進んで考え表現する子の育成を通して～

1 学校の概要（簡潔に）

- 現在の児童数 232 名（通常学級 10 学級、特別支援学級 2 学級）
- 日本語指導を必要とする児童 26 名
- 通常級の中には、必ず日本語指導を必要とする児童が在籍している。日本語指導の職員が個別に日本語指導を行う時間割を組んでいる。中には、全く日本語がわからない児童もいる。

2 研究の概要

(1) 児童生徒の実態と課題

本校では、「豊かな心を持ち、活力あふれる子どもの育成」を学校教育目標に掲げ、「学びを通した人間形成」を目指して教育活動を推進している。令和5年度、令和6年度と研究を重ね、今年度の全国学力・学習状況調査の「算数科」では、大きな成果が見られた。しかし、昨年度の課題にも挙げられていた、主体的に学習に取り組む児童とそうでない児童の二極化が今でも見られる。また、外国籍の児童、家庭環境に問題を抱えている児童も多い。これは、本校独自の実態も影響していると思われる。一部児童の基礎・基本の定着は見られるようになってきたが、全体的な定着が課題である。

(2) 学力向上のための取組

本校では、基礎・基本の確実な定着を図るために、指導方法や教材の工夫について校内研修を通して学校全体で取り組んでいる。また、昨年度の課題に挙げられていた、授業改善のためのタブレット活用について学校全体で研修を行い、活用方法を協議してきた。昨年度から引き続き行っている、「学習指導過程の中で、課題を明確にする工夫をし、児童が自らの課題を自覚できるようにすることで、授業を通して『わかる』『できる』喜びを実感できるようにすること」「課題解決の過程で、自分の言葉で表現する活動を取り入れることで、自ら進んで考え、表現することなどを通して、基礎・基本の確実な定着を図ること」の2点を教職員全体で意識し、研究を行ってきた。

本年度は、「まとめあげる場面」に着目し、授業の最後には自分でまとめを書きあげる時間を確保し、振り返りやまとめを重視した授業展開を行ってきた。「まとめあげる場面」では、個別最適化を意識し、児童がまとめを書きやすい環境をできるだけ整え、自ら学び進んで考え表現する児童の育成を行ってきた。

(3) 加配教員（学習サポーターを含む）の活用

本校は、県からの加配として少人数指導・県学習サポーター、また、市の加配として基礎学力定着特別講師・市学習サポーターが配置されている。特に、算数を中心に、次のように学習を行った。

①1年生、2年生について

少人数指導・日本語指導教員・市学習サポーターによるチーム・ティーチングで学習を進めた。必ず複数の職員で授業展開ができるように教育課程を編成した。

②3年生～6年生について

少人数指導・県学習サポーター・基礎学力定着特別講師による少人数指導を行った。クラス分けは習熟度別とし、それぞれ10人前後の人数で授業を行った。特に、学習が苦手なクラスは少ない人数での学習ができるようにクラス分けを行った。

③放課後の補習教室

今年度は2学期より実施する。1学期の学習状況を見て、3、4年生から抽出した。

委員会活動やクラブ活動のある火曜日の6時間目に開催した。

④五所っ子タイム

毎週火曜日の昼休みを五所っ子タイムとし、個別最適化の学習を目指し、子供たちが学習したいことを学ぶ時間とした。学級によっては共通の課題を行うこともあるが、フレキシブルに学習できる環境を整えた。

3 研究の成果

【全体】

- 「まとめあげる場面」に着目し、教材や発問の工夫をしたり、振り返りやまとめを重視したりすることで、「主体的・対話的で深い学び」につながるような授業改善を行ってきた。特に、個別最適化を意識することで、タブレットを活用しまとめあげたり、従来のノートにまとめあげたりと自分に合ったまとめ方ができるようにしていった。その結果、児童は自分の言葉で自信をもってまとめを書けるようになった。また、「できる、わかった」という児童が増えた。
- 今年度も引き続き、「五所スタンダード」として、授業の流し方、板書の仕方、ノートの取り方、小テストなど1年生から6年生まで統一することにより、学年や担任が変わっても、戸惑うことなく授業に参加することができた。本校のスタンダードとして定着した。そのため、児童は学習の仕方を理解し、意欲的に授業に取り組み、学力向上につながった。

【加配教員の活用】

- 3年生～6年生は3クラスの習熟度別で授業を展開することができ、非常に目が行き届く状態で学習を進めることができた。特に各クラス10人程度で授業できることから、個別指導の時間も十分とることができ学力向上につながった。
- 学習が苦手な児童や日本語がわからない児童など、学習の理解度に差がとてもあるが、ティーム・ティーチングや習熟度別で授業を行うことで、個別対応が可能となり学力の底上げができた。また、毎週火曜日の昼休みは学習の時間とし、個別に指導できるような体制をとり個別最適な学びを実現することができた。
- 特に会議を設けることはなく、本時の授業内容を振り返り、今後の進展について話し合うことができた。それに伴い、個別最適な指導を行うことができた。
- 学力だけでなく、児童本人の気持ちを優先し自分に合った学習進度のクラスで学習することができ、安心して授業を受けることができた。

4 今後の課題

- 2年間の研究を経て、できることが多くなってきた一方、自分の考えを話したり人の話を聞いたりすることが苦手な児童が多いことがわかってきた。今後はその課題を解決するための手立てが必要だと考える。